

地球市民教育としてのヒッポ・プログラム

東大・MIT・ヒッポファミリークラブ¹⁾の共同研究記念シンポジウムに参加して

尚絅学院大学 森田 明彦 教授



尚絅学院大学 森田 明彦 教授

2月15日と18日に、酒井邦嘉東大教授とスザンヌ・フリンMIT(マサチューセッツ工科大学)教授を報告者とする「多言語+脳科学」と題するワークショップとシンポジウムが開催され、私も18日のシンポジウムに参加した。

昨年4月よりヒッポファミリークラブ(以下、「ヒッポ」)の全面的な協力を得て、日本の大学としては初めて正規授業の一環としてヒッポの多言語習得プログラムを導入した。²⁾

学生の反応は想像以上で、「外国語に対する考え方が変わった。今までは難しいし、何を言っているかわからないから嫌いでしたが、今は分からなくてもなんとなく理解して、とりあえずマネをしてみようと思うようになりました」「初めて聞いたときは何を言っているのか全く分からなかった歌が、今ではなんとなく聞き取れるようになったことが自分でも驚きです」「いろいろな人と話せたら楽しいだろうなと漠然と思っていたんですが、今回の授業でなにがなんでも外国人と話さなければと思うようになりまし」等のたいへん前向きな感想が寄せられた。今日、世界は多文化、多言語、多信条社会化に向けて急速に変容しつつある。4つの公用語があると言われ

ていたルクセンブルクでは移民の子も達が急増して子どもデイケアセンターでは20カ国語が飛び交い、子ども達の間そして子どもと職員とのコミュニケーションすら困難な「パベルの塔」状況が日常化していると言われている。日本社会ですら、観光地では日本語、英語、中国語、ハンゲルが併記された案内表示が一般的になっている。

今後の大学教育において多言語教育の本格的導入は緊要の課題であり、ヒッポの長年にわたる多言語プログラムの実践経験はたいへん貴重である。その意味で、このたび東大とMITがヒッポ・プログラムを脳科学的に解明するという共同研究に乗り出すことになったことは大学関係者にとっては大きな朗報である。

18日には、シンポジウムに先立って千葉県流山市のヒッポファミリーとヒッポの若者たちグループによるパフォーマンスが行われた。そこで若者代表が自分の育ったヒッポの多言語環境を「いろいろな言葉を楽しんでいる環境」と表現し、その中で自分が「相手を思い



酒井 邦嘉 東大教授

スザンヌ・フリンMIT教授

やる気持ちをもった共鳴できる身体になれた」と語っていたことが印象的であった。ヒッポ・プログラムには共感力を高める効果があると感じていて、東大とMITの共同研究ではこの点も解明されることを期待している。

多言語と脳の活動
や構造を学ぶ

シンポジウムでは、酒井邦嘉東大教授が多言語に触れた体験で脳が新たな言語に反応してどのように反応するか、多言語を学ぶことで脳の活動や構造にどのような違いが現れるかをMRI scanner(磁場だけをかけて脳を解析できる装置)を活用して解明していきたいと共同研究に対する熱い想いを表明されたあと、「火星人が地球上の人間の言語を調べたら」という仮想的な質問を提示し「火星人は人間がみんな同じ言語(人間語、脳言語)を使っていると考えられるだろう」とチョムスキー博士の普遍文法理論の基本的アイデアを分かり易く説明された。酒井教授は、さらに多言語習得の3つの利点として(1)言語の多様性が身につく、(2)柔軟な理解力と応用力が身につく、(3)別の言語を習得することが容易になる、を挙げ、多言語を習得するには適度な情報に繰り返し触れ、情報の意味や意義を意図的に確認しなくとも言語が自然に身につくという能力を育てることが有効で、ヒッポ・プログラムのメタ話(さまざまな言語による会話CDを繰り返し聞いて自分でも真似てみるエクササイズ)はその意味でたいへん有効であると話され

た。さらに、人間は脳が成熟すると意識的・人為的に環境と接しがちになるが、それを克服できれば、年齢に関係なく多言語が習得できることのようにやるべきことが大切」と強調されたこと

スザンヌ・フリンMIT教授は「ことばを話すことは人間特有の特別な能力である」「基本的には人間のことばは一つしかない」「人間は遺伝的に人間の言語にプログラムされている」等、持論である言語理論を丁寧に説明された。なかでも、子どもは言葉で「教わる」のではなく周囲で聞こえる「ことばの音や形」を自然に選り分けていること、新しい言語を習得するにはほめられ、励まされ、自然な言葉をとくさん聞くことができ、そして強制されることなく、点数をつけられることのない環境(自然な方法)が重要であること、複数の言語を知ることが様々な次元においてポジティブな結果をもたらすこと、多言語



を身につけることは、他者のニーズに敏感となり、自尊心を育み、主義、信条や習慣などの違いに対する広い寛容の心を育てること、多くの言語を習得すればするほど、世界は狭くなり、世界や世界中の人々への理解が深まることを強調していたことが記憶に残った。

私が2014年12月に訪れたキプロスは歴史的経緯によって深く分断された多言語、多文化、多信条社会であるが、同地では異文化理解教育は平和教育、環境教育、人権教育、そして批判的思考を育てる教育を総合したもので行われているのではないかと考えられている。³⁾

「どんな言葉も話すひとにも心をひらいて向き合えるひと」を育てることを目指すヒッポ・プログラムはまさにそのような総合教育といわれる地球市民教育そのものなのである。

1) 一般社団法人言語交流研究所・ヒッポファミリークラブ (The Institute for Language Experience, Experiment, and Exchange: LEX, 1981年設立)「ことばと人間の科学的探究」をテーマに、年齢にかかわらず複数の言語(多言語)の自然獲得を目指す。(1)ファミリーと呼ばれる活動場所を中心とした「地域活動」、(2)世界中の人と出会う「国際交流活動」、(3)言語の自然科学的探究を目的とした「研究活動」に取り組んでいる。全国に活動場所(ファミリー)が約700ヶ所あり、0歳〜90歳まで約2万人が会員として参加している。

2) この実験的授業の概要については、2015年9月4日に東京で開催された平成27年度教育改革ICT戦略大会および同年12月21日より23日までニューヨーク(米国)で開催された国際研究集会(International Conference on Innovation in Arts, Social Science, and Education)において報告を行った。

3) 詳細は森田明彦「国際会議(文化的歴史理論より実践へ)」キプロス「トランスエンド研究」第13巻第1号(2015年7月)を参照。

自然と遊ぶ、仲間と遊ぶ

多言語自然キャンプ

小学生~大学生年代を中心に、多言語・多世代の人々が自然の中で活動し、国や文化の違いをこえて友情を育むプログラムです。詳細はフリーダイヤルからお問い合わせください。

【国内キャンプ】(3泊4日 長野 小4~大人)

- 雪の学校: 雪の活動と多世代・多言語交流。
- Nature Camp: 夏山体験と多世代・多言語交流。

【海外キャンプ】(1週間前後 8月開催)

- アジア青少年多言語自然キャンプ&ホームステイ 中1~大人。タイでの自然体験と現地家庭でのホームステイ。
- アジア青年多言語合宿&ホームステイ 高1~大人。上海の研修施設での合宿と現地家庭でのホームステイ。

Multilingual Natural Immersion

どんなことばにも開かれた心を育てる

多言語を学ぶ意味
大和田康之
(在米国際基督教大学財団理事)

私がこれからを担う真のリーダーシップについて必要だと思うのは「多言語を話す」というスタンスです。多言語を話すということは、「違ったことば、価値観を持った人を自分の中に受け入れる」ということ、「寛容」ということです。それは自分が人間としてより豊かになることです。ヒッポではまず相手の母語を大切にしようというスタンスで多言語を育てています。そんな世界が広がっていくことに、ことばを学ぶことの本質的な意味があるのではないのでしょうか。

●お申し込み・お問い合わせは、下記フリーダイヤルまたはホームページから

hippo 一般財団法人 言語交流研究所 **ヒッポファミリークラブ** ☎0120-557-761

平日9:00-17:30 休 日 150-0002 東京都渋谷区渋谷2-2-10 青山H&Aビル3F TEL.03-5467-7041 <http://www.lexhippo.gr.jp/> ヒッポ 検索